

日本アーカイブズ学会の活動

石原一則

日本アーカイブズ学会会長

1. 日本アーカイブズ学会について

日本アーカイブズ学会の石原一則と申します。昨年度から会長を務めております。はじめに、報告の機会を与えてくださった独立行政法人国立公文書館並びに EASTICA 事務局の皆様方に、厚くお礼を申し上げます。また、セミナーにお集まりの皆様の前で、このようにお話しできることを、大変光栄に存じます。

私は EASTICA セミナーに参加するのは今回で 3 回目です。これまで、2008 年のソウルと、昨年 12 月の北京でのセミナーに参加いたしました。いずれのセミナーもそれぞれの主催者である韓国や中国の皆様の手厚いおもてなしに、大変感激いたしました。ここで皆様と再会できたことも大きな喜びであります。

本日は、日本アーカイブズ学会の活動について報告いたします。日本アーカイブズ学会は英語名を“The Japan Society for Archival Science”と申しまして、略称は“JSAS”と言います。2004 年 4 月に設立されました。韓国の記録学会や中国の档案学会と比べれば、創立 11 年目の歴史の浅い、まだまだ若い学会です。

会員は現在、正会員と賛助会員合わせて 470 ほどでして、正会員は約 450 名、賛助会員は 19 団体です。正会員は個人で構成され、賛助会員は企業や大学などの団体が加入しています。ちなみに正会員の会費は年間 5,000 円、学生会員は 3,000 円、賛助会員は 1 万円以上をお願いしております。正会員になりますと、年 2 回発行される『アーカイブズ学研究』の購読と投稿、学会主催の研究集会での発表などが可能です。賛助会員には学会の事業を支援していただいております。

お集まりの皆様の中に、今日の私の話で、もし日本アーカイブズ学会にご関心をお持ちになられる方がいらしたら、是非ご連絡ください。いつでも、どなたでも、会員になることができます。

学会の宣伝はこのくらいにいたしまして、本題に入りたいと思います。

2. 学会の目的

日本アーカイブズ学会は 2004 年の設立と同時に会則を公表いたしました。会則では、学会の目的を次のように言っています。

「本会は、アーカイブズに関する調査・研究を行い、わが国におけるアーカイブズ学の進展に寄与するとともに、アーカイブズ制度の発展に貢献することを目的とする。」（会則第 2 条）

続けて会則第 3 条で、この目的を達成するために次の事業を行うことが明記されています。

- ①研究集会及び総会の開催、②機関誌及びアーカイブズ関係文献の刊行、
- ③ウェブサイトの運営、④国内外の関係団体・機関との交流、⑤その他必要と認める事業

これら 5 つの事業は、学会活動の領域を明らかにするものでありますが、本日はこれらの活動について報告をいたしたいと思います。

3. 研究集会について

日本アーカイブズ学会は学会ですので、なによりも研究活動が最も重要な事業であります。研究集会は毎年、春と秋と冬の年 3 回行われますが、なかでも春の年次総会に合わせて開催される研究大会は最も規模の大きいもので、企画研究会と自由論題研究会の 2 種類で構成されます。企画研究会は学会がテーマを発案し報告者を選びます。これまでに企画したテーマは以下のとおりです。

- ①2004 年「アーカイブズ学を拓く」（設立記念シンポジウム）
- ②2005 年「欠くべからざるアーカイブズ、求められるアーカイブズ」
- ③2006 年「アーカイブズ専門職の未来を拓く」
- ④2007 年「アーカイブズの〈力〉－歴史からの検証－」
- ⑤2008 年「アーキビスト資格制度の構築に向けて」
- ⑥2009 年「Archives Japan 50－アーカイブズ学からの照射」
- ⑦2010 年「公文書管理法がもたらすアーカイブズ学の課題～“レコードスケジュール”を中心に」
- ⑧2011 年「広がりゆく『デジタルアーカイブ』とアーカイブズ」
- ⑨2012 年「東日本大震災 1 年－これまでの活動と今後の課題」
- ⑩2013 年「放射線データアーカイブズの構築に向けて」
- ⑪2014 年「私たちの『アーカイブズ学』をとらえ直す－批判・検証・展望」
- ⑫2015 年「アーカイブズを学びに活かす」

①は設立記念として開催したもので、6名によるシンポジウムでした。②は韓国の民主化運動に関するアーカイブズの保存と阪神淡路大震災後のアーカイブズの保存に関するテーマで行われました。以下簡単に説明申し上げますと、③アーキビスト養成、④日本におけるアーカイブズ形成の歴史的検証、⑤アーキビスト資格、⑥日本のアーカイブズ50年の課題と展望、⑦日本のレコードスケジュールと韓国のレコードスケジュールについて、⑧デジタルアーカイブとアーカイブズとの関係について、⑨東日本大震災でのアーカイブズのレスキューについて、⑩福島原発事故による放射能・放射線データのアーカイビングについて、⑪設立10周年の回顧と展望、⑫11年目に入って新たなステージを目指したものであります。「アーカイブズを学びに活かす」は好評でしたので、来年度以降も「アーカイブズを何々に活かす」という形式で継続することを検討しているところです。

また、研究大会の重要な構成要素に、自由論題研究会がございます。これは正会員による研究成果の発表の場としてあります。毎年10件以上の応募があり審査を経て登壇してもらいます。発表のテーマは実に多彩です。これまで100人以上の会員が報告をしているので、ここで紹介することは不可能ですが、自由論題研究会で報告したものが、その後、学会誌の『アーカイブズ学研究』に投稿され、審査を経て会誌に掲載されることもあります。自由論題研究会は、文字通り会員の自由な発想に基づく研究発表ですので、学会の研究活動の重要な柱であると考えています。内容についてご関心をお持ちの方は、報告者名とタイトルが『アーカイブズ学研究』の最新号の22号に掲載されておりますので、参照してください。

秋と冬の研究集会も春の研究大会における企画研究会と同様、テーマと報告者は学会が選びます。この研究集会のテーマは、春の研究大会のテーマに比べるとアーカイブズの実務をめぐるテーマが多いですが、2012年11月に行われた「医療をめぐるアーカイブズ」という研究集会は、ハンセン病に関する記録や精神病院の症例誌に関する研究集会で、アーカイブズの実務者と利用者との両者による会合となり、参加者からは大変刺激的な集会だったという評価をいただきました。秋冬の研究集会の全体についても、時間の都合で省略いたしますが、報告者名とタイトルは会誌に掲載されておりますので、『アーカイブズ学研究』22号を参照してください。現在は、秋の開催地は東日本、冬は西日本と、日本の東西に分かれて開催されております。

4. 機関誌とウェブサイト

さきほどから何度か触れましたが、学会の機関誌『アーカイブズ学研究』は会設立の2004年から年2回発行して参りました。現在は22号まで発行しております。

機関誌の内容は基本的に、論文、研究ノート、動向、書評で構成され、発行号によっては年次総会の後に開催される講演会の記録も掲載しています。論文、研究ノート、動向は正会員からの投稿を受け付けており、近年は審査に追われる状態が続いているようです。私が編集委員をしていた数年前、会誌のあとがきに、審査が追いつかなくなるほどの投稿を期待する、と書いたことがあります。今、それが現実となって、編集担当の委員は悲鳴をあげているようですが、関係者としてはうれしい限りです。

学会の機関誌は、研究集会におけるテーマと同様、学会の研究動向や会員の研究の関心領域を知る基本的な資料になると考えています。機関誌の内容について触れることが、学会活動を紹介する方法としては最もふさわしいと思いますが、ここで会誌に掲載された内容を紹介する時間はありませんし、私の個人的な能力もありませんので、ご関心のある方は、以下の学会のウェブサイトをご覧ください。会誌の目次と要旨はここに掲載されており、また英文も併記されております。（<http://www.jsas.info/modules/publications01/>）

学会のウェブサイトも機関誌同様、設立当初から運営されて来ました。ただし、10年前のものとは大きく変わっております。形式だけでなく、提供するコンテンツについても大きな変化が学会に期待されています。今年の総会では、学会誌のオープン・アクセス化について要望する声が、会員からございました。学会誌のオープン・アクセスについては、学会の設立準備の段階にも論議したことがありましたが、当時は時期尚早という意見が支配的でした。それから10年が経過し、デジタル化は様々な場面で進められておりますので、日本アーカイブズ学会も遅ればせながら、検討しなければ、と考えています。

5. 関係団体・機関との交流

日本アーカイブズ学会は設立の段階から、国内外の関係団体や機関と協力・交流を続けて参りました。こうした協力・交流が、海外在住のアーキビストを招聘する機会に結びついています。2004年の設立大会では、オランダからアムステルダム大学（当時）のエリック・ケテラール氏、1年後の2005年はインドネシア国立公文書館長（当時）のジョーコ・ウトモ氏に来ていただき、各地のアーカイブズ事情について学ぶ機会を得ました。また、その他にも機会を捉えては、韓国の金翼漢氏、李昶龍氏、任眞嬉氏、金河元氏、ベトナムのヴァー・ティン・ミン・フォン氏などから、貴重な報告をうかがう機会がありました。これらの方々のご報告のほとんどは、学会の機関誌に掲載させていただくことができました。

2007年からは International Council on Archives に加入し、同時に EASTICA に加入いたしました。ただし資金的な限界から、年次総会や4年に一度の大会に学会から会員を派遣したことはありません。これまで、これらの会議に出席した会員はすべて個人的な負担で行

っています。来年のソウル大会は学会としての派遣を検討していますが、予算と相談しながらなんとか実現させたいと考えています。

視点を国内に向ければ、関係団体・機関との交流としては、近年は「東京電力福島第一原子力発電所事故に関連する放射線・放射能測定データアーカイブズワーキンググループ」への参加があります。2011年3月11日の東日本大震災は、日本のアーカイブズ関係者に様々な課題を突きつけました。前述しましたが、2012年4月の研究大会は「東日本大震災1年—これまでの活動と今後の課題」と題して、4つの報告で構成しました。それぞれの報告が喫緊の課題を明らかにするものでしたが、とりわけ政池明氏による「原発事故による放射線測定結果のアーカイビング」は、事故によって放出された放射性物質に関する測定データの保存を唱える報告であり、緊急性を要するものでした。そして、2012年の9月から、日本アーカイブズ学会は日本物理学会と国立国会図書館の協力で設けられた合同ワーキンググループに参加し、放射線測定アーカイブズの保存に向けて取り組むことにいたしました。

この活動は2013年には、日本学術会議総合工学委員会の「原発事故による環境汚染調査に関する検討小委員会」の正式なワーキンググループに位置づけられました。そして11月1日には、日本物理学会と連名で「福島第一原発事故に関わる放射線測定データの保全と後世へのアーカイブズ化を」と題した共同声明を発表いたしました。同時に、ワーキンググループによってウェブサイト「放射線・放射能測定データアーカイブズ」(<http://www.radarc311.jp/>)が立ち上げられ、測定データの収集が始められております。現在は、データの公開等について協議しているところです。これらの一連の動向については『アーカイブズ学研究』17号(2012.11)と19号(2013.11)を参照してください。

6. 登録アーキビスト

最後に、今、学会が最も力を入れている取り組みについて触れたいと思います。それは2012年度から開始した「日本アーカイブズ学会登録アーキビスト制度」であります。これは日本アーカイブズ学会がアーキビストの資格基準を示し、その充足者をアーキビストとして学会が認定し、登録するという制度です。

この制度の基本にある考え方は、「日本アーカイブズ学会登録アーキビストに関する規程」の前文に表されています。つまり、「アーキビストとは、アーカイブズ学にもとづく体系的な知識と技能を有し、アーカイブズ機関等において記録ならびにアーカイブズの管理等の専門的業務を遂行し、その職務を通じて、広く社会に奉仕する者」という理念です。

このアーキビスト理念の具体的な目標が、同じく登録アーキビストに関する規程の前文に表されています。曰く、

- (1) この分野を目指す若者や関連する現職者等にアーキビストの存在を示すこと。
- (2) 世界の標準やアーキビスト倫理に通じるアーキビストの基本的な知識・技能を明示すること。
- (3) 雇用機関・団体等に対して専門的な職務を果たすことができる人材を明示すること。
- (4) アーカイブズに関する研究活動をよりいっそう促進すること。
- (5) 専門機関・高等教育研究機関等が連携しながら教育・研修体制を整備していくために共通の知識基盤を提示すること。

昨年度までの登録者数は 60 名です。今年度の申請受付は 10 月 1 日から 10 月 31 日までであり、現在受け付けている最中であります。資格認定の基準については、重要な部分をパワーポイントに示しましたのでご参照ください。

現在の日本の状況から見て、先ほどの目標がすぐに実現するとは考えておりませんが、ここにお集まりの皆様方は、アーカイブズ・マネジメントや記録保存に携わっておられる方々でありますし、私たちの目指す方向は共有できるものと確信しております。

日本のアーキビスト制度を構築するためにはまだ課題が少なくありませんが、関係する諸団体・諸機関が一体となって、アーキビスト制度を実現させることを呼びかけたいと存じます。海外からお越しの皆様にも、日本のアーカイブズの動向にご関心を持っていただければ、大変ありがたく存じます。

以上で、日本アーカイブズ学会からの報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。